

藤原道長・頼通親子の摂関時代（後編）

思いもかけず兄二人が死没し、姉詮子（円融天皇の後、一条天皇の母親）の引きがあつて道長は内覧、左大臣の公卿筆頭の地位に就きます（その時関白はいません）。

この後はややこしいので、後掲の「藤原道長と天皇との姻戚関係図」を参照しながらお読みください。

更に姉詮子の引きで娘彰子（しょうし）が一条天皇のもとに入内します。

彰子が一条天皇の皇子を二人も生んだことで、道長は絶対権勢者の道に進みます。

ここで道長がやっておかなければならないことがあります。

一条天皇の後継には彰子が生んだ皇子ではなく、冷泉天皇と超子（ちょうし、道長の妹）と間の皇子居貞親王（おきさだ）の天皇（即位して三条天皇）が決まっていた。

道長は娘の妍子（けんし）を三条に妃として送りこみます。

一条は病気のため譲位（1011年。同年没 32歳）。三条が即位します。

三条天皇が妍子以外の妃である城子（せいし）を皇后としたため、道長と仲たがいません。三条天皇の眼病を理由に道長によって退位に追い込まれます。三条天皇は息子の敦明（あつしあきら）の皇太子を条件に退位し、後には後一条天皇が即位します（1016年）。

後一条は一条天皇と彰子（道長の娘）との子です。後一条は八歳と幼少ですので摂政は道長です。

道長は外祖父となり、天皇の権力を掌握しました。

1017年、摂政1年で摂政を息子の頼通に譲りますが、実権は没するまで道長が掌握します。

三条院が没します。子の敦明は道長の権勢に鑑みて皇太子を下ります。道長は皇太子を後一条天皇の弟敦良（一条の子、彰子の次子）とします。

後一条天皇には道長三女の威子を入内させます（1018年）。

天皇家のことは道長と道長の娘彰子が差配します。

ここで道長の和歌です。

「この世をば 我が世とぞ思ふ 望月の 欠けたる事も 無しと思へば」

筆者訳：この世は自分のためにある。満月のように欠けて足りないものはない。（権力はすべて手中に収めたの意味）

篠田信一さん著の「天皇たちの孤独」から引用します。

一条天皇がある朝食事をしようとしたところ給仕役の貴族たちの誰もいない。

天皇が朝晩の食事は、台盤だいばんという大きな食卓があつて大床子だいしょうじという大きな椅子に座っている天皇に食事を運ぶ給仕役がいないと天皇は食事がとれません。

椅子は大きく食卓の料理に手が届きません。

給仕役の貴族（五位の殿上人）は当番制で天皇のお世話をします。

この日は当番の貴族たちはみんな仕事をすっぽかしてしまったのです。

何があつたのか。

道長の息子の頼通（後の関白）の奈良の春日神社（藤原氏の氏寺）詣でについて行ってしまったのです。（この話は藤原実資の日記「小右記」に出ています）

この時代大臣や有力者がプライベートで別荘に行く時や、寺社参詣、法会を催す時は御供し、参列します。

これを追従ついでと言います。後世追従の意味はこびへつらうの意味になりましたが、まさにそうなのです。

しかし、天皇のお世話の当番がみんな最高権勢者の息子に就き従って行ってしまふとはなんと、天皇と堂上家（藤原本家）の位置をどう見ていたのかです。そのように見ていたのです。天皇より道長を恐れていたのです。

閑話休題

その後、皇太子敦良親王（後の後朱雀、娘彰子の次子）にも道長は四人目の娘嬉子を妃にします。（1021年）

1027年道長はすべてを嫡男関白頼通に託して没します（62歳）

晩年は死後の極楽浄土を願って出家し、法成寺を建立し、ここで没しました。

法成寺を御堂ほうじょうじ みどうと言ったところから彼を御堂関白みどうかんぱくと言い、以後摂関家のことを御堂家と呼びます。

但し道長は関白にはなりませんでした。内覧、左大臣、摂政の職位でした。

理由は分かりません。ただ関白でなくても権勢を掌握できたのです。息子の頼通には関白を就かせました。

頼通よりみちは父親の道長が生存中の1017年から摂政、関白につきますが、実権を得たのは道長没後の1027年からです。

後一条が亡くなります(1036年)。皇子はいません。弟の後朱雀天皇が即位しました。

后にはすでに道長娘嬉子が嫁いでいます。頼通は関白を続けます。

頼通は道長の後1067年まで後一条天皇、後朱雀天皇の関白を続けます。各天皇に対し外伯父の立場になります、道長の権勢は息子にも引き継がれるほど大きかったとも言えます。

道長の御堂家の摂政・関白が決まります。

それと天皇家で強い発言力を持つ上東門院藤原彰子(道長の娘、一条天皇の後、頼通の伯母)は1074年まで健在で頼通をバックアップしてくれたことで、頼通は権勢を維持できたのです。

天皇家の最終の決めは、彰子、関白頼通、天皇で相談して決められていたのです。

頼通の栄華は盤石に思えました。

しかし更に御堂家の基盤を盤石にして次の世代に伝えるためには、道長と同じように自分の娘を天皇の后に入れることでした。

天皇継承の後一条(彰子の長子)には道長の娘威子ごすざく、後朱雀(彰子の第二子)には同じく道長の娘嬉子が入内しています。但し後一条天皇には皇子が出来ないまま亡くなります。

後朱雀天皇には嬉子との間に皇子が生まれます、後朱雀亡き後、その皇子である後冷泉天皇あとれいぜいてんのう即位となります。(1045年)

後冷泉には頼通は娘寛子を送りこみますが、皇子が生まれることなく後冷泉は亡くなります。

後冷泉に皇子なく順序として後は後冷泉の弟、後朱雀の次男の^{たかひと}尊仁親王＝後三条天皇の即位となります（1068年）。

この天皇の母親は禎子内親王^{ていし}と言って、道長娘の妍子^{けんし}と三条天皇の間の娘です。後三条と頼通との関係は外大伯父で、彰子とは祖母の関係になります。御堂家（藤原関白家）と天皇家の姻戚関係は道長時代よりうすくなります。

後三条天皇に代わった所で頼通は関白をおります。後を息子の師実に譲りたかったのですが、弟の教通が切望し、彰子の裁定で関白は教通に決まりました。

ただ、頼通と彰子が没する1074年まで天皇家の決定は彰子と頼通の二人と天皇によったのです。

ここで内政です。

関白頼通の後期から荘園問題が起こります。荘園が拡大し摂関家初め上層貴族、寺社領は増えますが、公領からの収入が減少します。

朝廷運営に支障をきたす大問題ですが、関白も最大の荘園領主であり、決定的な施策を打ち出せません。

これ等により御堂家の権勢が下向き、相対的に天皇（後三条）の権威が上向きになって来ます、

ここで後三条天皇が譲位し、息子の白川天皇が即位します（1072年）。院政を敷こうと考えたとの説もありますが、病気だったのでしょうか。翌年に亡くなります。（40歳）。

頼通が翌年1074年に没し（83歳）、同年続いて彰子（87歳）が没します。

白河天皇＝白川法皇時代の始まりです。

弟の関白教通も1075年に没します。（80歳）

摂関政治の終焉で院政時代の始まりです。しかし藤原摂関家は一定の勢力を持って江戸時代末期まで続きます。

道長、頼通親子の時代で藤原本流（北家—御堂家）の摂関家が定着しました。

道長は関白には就きませんでした。政権の首班（左大臣、内覧の職）になりました。

一条天皇の後に彰子を送りこめたのも姉詮子の政治力です。（彰子の子、後一条、後朱雀が天皇に）

詮子亡き後は娘彰子が天皇の母親、祖母として実家の道長、頼通親子をその政治力で支えました。

道長、頼通親子の政権は道長の姉と娘の力で権勢を維持したのです。これは女帝を除いて奈良時代の聖武天皇の後の藤原光明子の政治力と共に政治史に残る女性史の大事な1頁です。

後は院政時代、武士の時代と続きますが別稿としたいと思います。

以上

2019年11月16日

梅 一声

藤原道長と天皇との姻戚関係図

